二〇一七（平成二九）年三月一九日（日曜日）
第一三回　聖書と内村鑑三に学ぶ会　発表レジュメ

賀川豊彦と内村鑑三
――『新紀元』同人を媒介とする「キリスト教社会主義」から「イエス主義」までの軌跡――

独立系研究者　倉井香矛哉

※本レジュメは、発表直前の三月一七日（金）～一八日（土）に大分県竹田市を訪問ののち、熊本空港直近の某所宿泊中に資料を集約、一九日（日）の発表当日、羽田空港到着後に清書したものです。最低限の範囲で、誤植等を青字で修正しました。

一．はじめに

本発表では、近代日本における著名なキリスト者である賀川豊彦と内村鑑三の二人を対置することによって、彼らの信仰及び思想信条の特色を明らかにすることにしたい。その際、二人を媒介する人物群として、安部磯雄や木下尚江らの刊行した「キリスト教社会主義」の雑誌『新紀元』の同人たちの存在が浮かび上がってくる。今回は、とくに（内村に対置するかたちで）賀川豊彦の思想に焦点を当てながら、明治、大正、昭和の期間にわたる近代日本のキリスト教思想の一支流に焦点を当てることにしたい。

二．賀川豊彦のキリスト教倫理をめぐって

賀川豊彦は、さまざまな領域にその影響力を及ぼしている。その一端を表している研究を以下に引用する。

《資料①》竹中正夫「賀川豊彦における基督教倫理」、『同志社大学人文科学研究所紀要』第三号（同志社大学人文科学研究所、一九六〇年三月）

おそらく日本におけるキリスト者と社会問題の連関において賀川豊彦ほど問題を広範な領域にわたって提示している存在はないであろう。貧民救済やセッツルメント事業に始まり、労働組合運動、社会主義運動、協同組合運動、農民組合運動、平和運動を中核として、「死線を越えて」などに代表される文学活動や芸術論を含み、「女性讃美と母性崇拝」などにみられる婦人解放運動への関心から、近著「宇宙の目的」にあらわされる宇宙論に至る広範な領域に於てキリスト教と社会、信仰と文化の関連を明らかにしている。

そして、賀川の旺盛な活動の本源にあるのは、「イエスの言葉」を中心とするキリスト教倫理であることはまちがいない。

《資料②》賀川豊彦「イエスの宗教とその真理」（大正一〇年一二月、警醒社）

傷つけられたる魂にイエスの言葉は恩の膏である。それは温泉の如く人を温め　噴水の如く力づけてくれる。解放の日に　イエスの愛は感激の源であり、犠牲の旗印である。神は強い。そしてイエスはその最も聖く最も強い力の神を教へてくれる。

これらの活動、及び著作は、キリスト教倫理に基づくものとして、基本的には肯定的に評価することができると考えられる。しかし一方、一部の発言に対しては、戦争責任、あるいは科学的な誤謬に関連しての批判も見られる。

《資料③》金田隆一「戦後の日本キリスト教団、キリスト者グループの戦争責任問題に関連して――賀川豊彦らを中心とする天皇制擁護と天皇制の本質について――」

「天皇の政治責任と天皇制の本質を理解する時、賀川豊彦始め日本におけるキリスト教の指導者達が、たとえ純粋な福音宣教の立場で皇室伝道に奉仕したと考えても、それはあくまでも「天皇制護持」の政治的手段に利用されたにすぎず、真の意味での宣教の業をなしたとは申されまい。」

右に引用したのは、しばしば賀川豊彦に対する批判において論じられる天皇制との関わりについてである。その他にも、以下のような賀川の科学的な探究について、批判もみられる。

《資料④》賀川豊彦「先づ天を知れ」、「皇紀二千六百年信仰者日記より」（一九四〇年）

「日本の氣象學者は天文を考へず、日本の天文学者は気象学を無視する。しかし、周期的に起る旱魃に、木星と土星のそして火星と金星の引力の作用がないと、誰か否定し得るか？　印度の飢饉を見ても、それは殆んど木星の運行と一致し、日本の旱魃は大抵木星と土星とが地球に最も接近した時に起つてゐる。

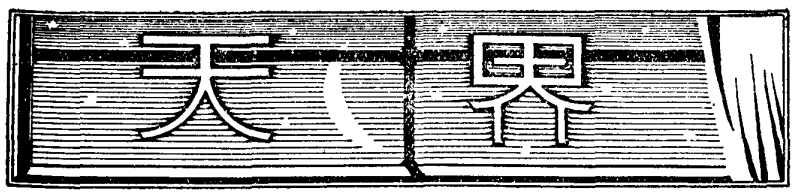
月が地球の水を引きあげることが出来るならば、木星や土星が空気ぐらゐは引張るだらう。木星は一二年目に、土星は三〇年目に一回転する。

天文学は唯単に抽象論として研究さるべきではない。火山の爆発、地震、海嘯の起元、又旱魃と洪水と、寒さと湿り気に関係させて研究さるべきである。

天を語るものは、先づ天を知らねばならぬ。」

ここでは、賀川豊彦にとっての「天」が「天文学」とむすびつけられており、概念規定の特異性が表れている。しかしながら、賀川の宇宙論は、編者から「賀川先生の言はれることは一面の眞理に違ひありませぬが、しかし木星や土星が地球の気象や異変に関係するやうに解されるのは少々脱線でせう」と否定的に捉えられており、以下のように科学的に検証された上、基本的に否定されている。

《資料⑤》山本一清「宇宙を観る、人生を観る」、『天界』第二〇巻三月号（一九四〇年二月）



第227號（第 20 巻）　（昭和15年）3 月 號

巻頭　**宇宙を觀る，人生を觀る**　隨筆

山　本　一　清

賀川豐彦氏が最近年，時々通俗講演などの話題の中に，木星や土星などの大遊星の引力が我が地球の氣象や地震等に影響するかも知れないといふやうな思ひつきを述べられるので，讀者の中にも時々本會の方へ質問をされる人がある．之れについて，やはり西洋人の中にも，永い以前から，こうした疑問を有つてゐる人がないではない．

此の問題について，先づ，地球に與へる諸天體の影響中，一々計算して見ると，光りについては，

太陽は光度が－27.6だから，之れに比べると，

満月は	最大の光度が	－12.5,	卽ち	太陽の	1000000分ノ一,
金星は	〃	－4.3	〃	〃	2000000000分ノ一,
火星は	〃	－2.5	〃	〃	10000000000分ノ一,
木星は	〃	－2.3	〃	〃	15000000000分ノ一,
土星は	〃	＋0.0	〃	〃	100000000000分ノ一,

熱量については，太陽のみが發熱體であつて，他は皆，太陽熱を一旦受けて反射する遊星に過ぎないから，月や遊星から地球に來るものは，太陽熱の何千億分の一にも足りない．

引力作用は，ニウトンの法測により，質量に正比例し，距離の自乘に逆比するのだから，太陽の引力を１とすると，

天　體	質　量	最小距離	引　力	潮汐力
月	0.0000000368	0.0024單位	0.00620	2.58
水　星	0.0000001	0.533	0.000000035	0.00000065
金　星	0.00000248	0.272	0.0000335	0.000123
火　星	0.000000323	0.380	0.00000223	0.00000587
木　星	0.000955	4.20	0.0000540	0.00001285
土　星	0.000285	8.00	0.00000445	0.000000556
		合計	0.006294215	2.580142926

ここにもその一端が表れているように、賀川の神学及び思想には、体系的な整合性に乏しい言説も含まれている。すでに竹中正夫が「賀川豊彦における基督教倫理」（前掲）において言及しているように、「賀川豊彦は神学的課題の把握表現において決して組織的体系的になしているわけではない」のであり、「冷徹な論理の中に啓示を体系化するのではなく、暖かい涙と共にうたいきる詩人的性格」が強いとされる。また、賀川にとっての宗教は「生きる道（religion is a way of life）」であり、「キリストの十字架に於いて完全にあらわされた神の愛が彼の信仰の核心をなしている」のである。つまり、科学的言説の語彙、装いであっても、そこにあるのは詩的な想像力であり、実体験にもとづく「神の愛」を語ることにこそ力点が置かれていたのである。

また一方、同じく竹中正夫の「賀川豊彦における基督教倫理」では、「賀川豊彦の基督論の中に神の心即ち贖罪愛をあらわしたイエス・キリストが強調されている」半面、「イエス・キリストと神又は聖霊の関係が三一論的に理解されていないうらみがある」という点を指摘している。賀川豊彦の神学においては、「神と人とを結び又社会における人と人とを結ぶ概念として特に用いられている表現は意識という言葉」なのである。

↓ヘーゲル左派に位置づけられるフォイエルバッハの宗教批判（個人の「真実の信仰」の否定ではなく、既成教会の神学体系に対する批判）との論理的共通性を指摘することもできる。フォイエルバッハは、人間存在の本質を「意識」に置き、既存の三位一体解釈とは異なる思索を展開していた。賀川はヘーゲルを高く評価しており、彼の神学的前提の一端は、ヘーゲル左派にあるといえるのではないか。ただし、賀川は「宗教とパン問題」においてフォイエルバッハに言及しつつ、「あまりに唯物的にすぎる」と批判している。ここからも、しばしば社会主義者に共鳴していた賀川にとって、「唯物的」であることは肯定的評価にはつながらない、ということがわかる。

三．賀川豊彦と『新紀元』

賀川豊彦の神学及び思想形成において重要な意味を持っているのは、安部磯雄や木下尚江らの創刊した雑誌『新紀元』である。彼らは「唯物的」な社会主義とは一線を画し、思想運動として成功したかどうかはともかくとして、「キリスト教」と「社会主義」の両輪による言論活動を行っていた。

歴史的な文脈からみたキリスト教社会主義は、一九世紀における資本主義の広がりに対して、その矛盾を解消し、産業革命以後の労働者の権利を守るための運動としてはじまった。代表的指導者として、英国のラドローとモーリス、チャールズ・キングズリーがいる。日本においては、安部雄、片山潜、石川三四郎、木下尚江らの刊行した月刊紙『新紀元』をはじめ、賀川豊彦をはじめとする作家がキリスト教社会主義の立場を表明していた。

《資料⑥》賀川豊彦「「良人の自白」の感想」、『賀川豊彦集』（日本書房、一九六〇年八月）

「私は、一七八歳の頃から二十一二歳の頃まで、木下尚江氏の作品のほとんど総てを読んだように記憶している。（中略）そして私が、木下尚江氏の最後の論文を読んだのは、幸徳秋水の「キリスト抹殺論」に対する反駁論であった。（中略）そして、もうかれこれ一八九年もたち、そのころ夢想だもしなかった大きな労働組合が日本各地に組織せられ、安部磯雄氏が代議士になり、堺枯川氏が東京市会の椅子に座るようになった。そして多くのプロレタリア文学者も相当の地位を保つようになった。しかし私として懐かしいのは、新紀元派として知られた理想主義者の作品である。」（傍線は引用者）

なお、当初、賀川は「キリスト教社会主義」を標榜していたが、のちに「イエス主義」へと転換している。前述のように、賀川の三位一体論は父、子、聖霊の関係性が希薄であり、正統的なキリスト教神学とは異質な論理を含んでいるものの、救い主イエスによる贖罪の意識を中心に据えていることから、キリスト教倫理を中心に据えていたことはまちがいない。これは、十代の多感な時期から、マルクス派の社会主義者にではなく、「新紀元派として知られた理想主義者の作品」に、とりわけ、のちに宗教的な回心を迎える木下尚江に傾倒していたことからも納得される。

四．賀川豊彦と内村鑑三

さらに、近代日本を代表する独立伝道者の一人である内村鑑三もまた、当初はキリスト教社会主義に一定の理解をみせていた。『新紀元』第一号に寄稿された内村の文章には、「社会主義が暴徒の巣窟と成り了らんかを恐れたり」という一文がみられる。そこからは、キリスト教社会主義への理解とともに、唯物論的な社会主義に対する痛烈な批判を読み取ることができる。

ただし、以下の言及のなかでみられるように、内村と社会主義者たちの交流が途絶えたかに見える時期以降も、また、「別の形態の社会主義への共感」は残っていた。

《資料⑦》柴田真希都「明治期・内村鑑三における〈独立・自由・個〉の展開（2）――反・社会観と親・社会主義の様相――」、『アジア・キリスト教・多元性』第一三号（現代キリスト教思想研究会、二〇一五年三月）

内村が社会主義と表向き決別したのが一九〇七年春ごろであるとみられる。同年三月に自分の集会に出席していた福田英子の出席を拒絶したことで、社会主義陣営からいくつか非難を浴びたことが事件として目立つ。この頃は幸徳らが片山潜ら議会政策派と対立し、ゼネストによる直接行動論を展開しはじめたころであることに注意したい。そうした社会主義運動内部の風向きがいよいよ変わってきたことを内村も察知していたのであろう。筆者としては、この時死期が近く、同年五月には死去する内村の父が、盛んに社会主義を嫌い、そのことが内村の懸念事となっていただろうことを指摘しておきたい。

（中略）

とはいえ、内村はその時「今日我国に於て唱へらるゝ社会主義」と限定的表現によって社会主義を否定したことには注意したい。彼の中にはこの時点で、まだ西欧諸国において試みられてきた、別の形態の社会主義への共感が強く残っていたのである。

その一つは予想されるごとく、キリスト教社会主義である。内村は個人の霊的変革に立脚した上での社会改革思想を歓迎したが、その文脈で、キリスト教社会主義には依然、一定程度期待するところがあった。内村と社会主義との縁が表向き切れたように見えたとしても、たとえばユニテリアンをはじめキリスト者の社会における働きへの積極的な評価があれば、必然、またその担い手とつながることになる。内村は安部磯雄との付き合いもあり、また賀川豊彦をそれなりに評価していたことから、そういった消息が大正期以後もゼロでないことは看過されえない。（傍線は引用者）

ここで留意すべきは、社会主義という言葉のもつ多義的な側面である。いわゆるマルクス派社会主義とは一線を画していたキリスト教社会主義に関する言説は、近代社会、とくに明治以降の日本の歩みを省察するにあたっての思想的な〈断面〉を示しており、『新紀元』同人らに影響を与えた内村鑑三と、『新紀元』同人から影響を受けた賀川豊彦は、おなじ思想的圏域にいたといえる。

五．まとめ

今回の発表では、内村鑑三と同様に近代日本屈指の影響力を持っていたと考えられる賀川豊彦に焦点を当て、内村の著作と対置することによって、双方の特色を浮かび上がらせることを目的とした。賀川の言説には、人間存在の「意識」を中心とする科学的な探究という側面もあり、聖書と進化論の両方を肯定していた内村鑑三と同様に、近代的な言説としての意味合いを持っていると考えられる。両者の言葉が後世に影響を与え、多くの後進を輩出したことには納得のいくところである。

一方で、賀川豊彦の発言には、現代の視点から見れば批判の対象となるものも含まれている。これらはもっぱら時代的制約に負うところも大きいと思われるが、現代の福祉事業に対しても依然として大きな影響力をもっている賀川豊彦であるだけに、今後とも批判的な検討を行いつつ、その意義を新たにしながら継承していく努力が必要であると考えられる。

【資料⑧】賀川豊彦の路傍伝道に起源をもつ社会福祉法人・学校法人「イエス団」（http://jesusband.jp/kagawa.html）